

## 計量文献学の観点から『万の文反古』の検討

上阪彩香<sup>†</sup> 村上征勝<sup>††</sup>

『好色一代男』などで知られる江戸時代前期の作家井原西鶴（1642?～1693）の遺稿集とされる5作品に関しては、門下の北条団水らによって加筆・修正されたのではないかという疑問が出されている。本研究では、遺稿集の『万の文反古』に関し、文章の計量分析という観点から、この問題の検討をするため、『万の文反古』の文章と西鶴作であることが確実な『好色一代男』の文章との比較を試みた。また、遺稿集のなかの『西鶴織留』の文章との比較も試みた。

### On a Quantitative Analysis of “Yorozu no Fumihougu”

AYAKA UESAKA<sup>†</sup> MASAKATSU MURAKAMI<sup>††</sup>

This paper discusses authorship problems in the works of Saikaku Ihara, who was a famous writer in the Edo period. His work has been studied for three centuries, yet in spite of these efforts there are some problems which remain to be answered. The aim of this research is to examine “Yorozu no Fumihougu” published after his death was rewritten by his followers. In this research, we analyze the frequency of main parts of speech by means of a principal component analysis.

#### 1. はじめに

江戸時代前期の作家井原西鶴（1642?～1693）は、多数の浮世草子を残している。しかし、これらの作品に関しては、処女作である『好色一代男』のみが西鶴の手によるものであるとする森銑三の西鶴論[1]をはじめとして、西鶴作品の多くに関し、著者に関する疑問が出されている。

現在、西鶴作品として知られる24作品（『好色一代男』・『諸艶大鑑』・『椀久一世の物語』・『好色五人女』・『好色一代女』・『西鶴諸国はなし』・『本朝二十不孝』・『男色大鑑』・『武道伝来記』・『好色盛衰記』・『懐硯』・『日本永代蔵』・『色里三所世帯』・『武家義理物語』・『嵐は無常物語』・『新可笑記』・『本朝桜陰比事』・『世間胸算用』・『浮世栄花一代男』・『西鶴置土産』・『西鶴織留』・『西鶴俗つれづれ』・『万の文反古』・『西鶴名残の友』）は、西鶴の手によると考えられているものの、『好色一代男』以外の作品については著者等に関し、検討が続けられているものもある。

この小論では、西鶴の没後に遺稿集として出版された『万の文反古』の文章について、品詞の出現率の観点から、検討する。

#### 2. 『万の文反古』に関する疑問

遺稿集として出版された作品及び出版年は、以下の通りである。

第一遺稿集 元禄6年刊（1693） 『西鶴置土産』

第二遺稿集 元禄7年刊（1694） 『西鶴織留』

第三遺稿集 元禄8年刊（1695） 『西鶴俗つれづれ』

第四遺稿集 元禄9年刊（1696） 『万の文反古』

第五遺稿集 元禄12年刊（1699） 『西鶴名残の友』

これらの5作品は、西鶴が生前に執筆したとされる未発表の草稿を、元禄6年（1693）から元禄12年（1699）にかけて、西鶴の門下である北条団水らが編集し、出版したものであるが、西鶴の没後、出版されていることから、他作者説や補作・補筆・修正・擬作などの疑問が出されている。

本研究で対象とする『万の文反古』は第四遺稿集として、西鶴の没後三年目の元禄9年（1696）に出版されている。この作品は、十七章の短編からなる書簡体小説集である。

遺稿集であることから西鶴作の吟味がなされ、現在では、ほぼ西鶴作品とされている[2]。しかし、十七章すべてが西鶴の手によるかどうかについては完全に解明されたとはいえない。

さらに、『万の文反古』には以下のような問題も提起されている。

##### (1) 板下の問題

従来、板下が西鶴筆であるということが、『万の文反古』を西鶴の作品であるとする根拠の一つであったが、山口剛[3]によって、以下のような板下擬筆の問題が提起された。

「文反古」の版下は西鶴らしくという点からいへばかなり巧みである。ただ似せて、似せたあとを見せまい、真蹟の筆法より弱くしまいとした結果は、無理な力を籠めて、やゝ線が太く、やゝ丸みを欠いてゐるやうである。

<sup>†</sup> 同志社大学大学院文化情報学研究科博士前期課程  
Doshisha University Graduate School of Culture and Information Science  
<sup>††</sup> 同志社大学  
Doshisha University

この指摘を受けて、中村幸彦[4]は書誌的な面から検討し、板下が擬筆であるとしている。以後、『万の文反古』の板下擬筆説は通説となっている。

(2) 出版時期

第四遺稿集である『万の文反古』の版元は、第二遺稿集である『西鶴織留』と同じ大坂雁金屋庄左衛門・京都上村平左衛門・江戸万屋清兵衛である。

同じ版元から出版されているにも関わらず、未定稿の部分がある『西鶴織留』よりも完全なかたちを持っている『万の文反古』の方が後に出版されたのは、何故なのかという疑問もだされている[3]。

(3) 団水序文

第四遺稿集『万の文反古』以前の第一遺稿集『西鶴置土産』から第三遺稿集『西鶴俗つれづれ』と第五遺稿集『西鶴名残の友』は、団水の序を持つが、『万の文反古』のみ団水の序文がないという問題が指摘されている[3]。

(4) 団水の作品との類似性

『万の文反古』は遺稿集であることから、団水の補作などが疑われてきた。

板坂元 [5] は、『万の文反古』巻三の一「京都の花嫌ひ」の一部が、団水の青年期の作品とされる『色道太鼓』に追加の章の一部とほぼ同文であり、この部分は、団水の補筆を思わせるとしている。

このように『万の文反古』には、様々な疑問が挙げられている一方で、暉峻康隆 [6] は、問題にされてきたところは西鶴の作品であることを否定する決定的な条件ではなく、作品中に西鶴以外には求められない思想があることなどを理由とし、『万の文反古』を西鶴作であるとしている。また、谷脇理史[7]も様々な問題が提起されてはいるが、西鶴でないとは描けない斬新な内容であるとして、全十七章すべてを西鶴の作としている。

3. 分析手法

3.1 分析に用いたデータ

本研究で用いた底本は、浅野晃、富士昭雄、谷脇理史、西島孜哉、小川武彦、篠原進編集の『新編西鶴全集 1 巻～第 4 巻・本文篇』[2]である。この全集には、24 作品が収録されているが、計量分析には、このなかの村上研究室においてデータベース化された『椀久一世の物語』を除く 23 作品を用いた。(以後これを「西鶴全集データベース」と記す。)

このデータベースでは、23 作品のすべての文章が単語に分割され、それぞれの語には品詞や活用形に関する情報が付けられている。このデータベースに準拠した場合、23 作品の総語彙数は 578, 617 語であり、最も長い作品は『男色大鑑』で 51, 775 語、最も短い作品は『嵐は無常物語』で

8, 730 語である。

表 1 は、分析に用いたデータベースの一部（『好色一代男』巻 1 の冒頭）である。

表 1 西鶴全集データベース (¥は改行)

作品名	巻	本文古字	本文新字	品詞	活用形	現代がな終止	現代がな活用
一男	巻一	けし	けし	動詞	連用	けす	けし
一男	巻一	た	た	助動詞	連体	た	た
一男	巻一	所	所	名詞		ところ	ところ
一男	巻一	が	が	助詞		が	が
一男	巻一	恋	恋	名詞		こい	こい
一男	巻一	の	の	助詞		の	の
一男	巻一	はじまり¥	はじまり	名詞		はじまり	はじまり
一男	巻一	桜	桜	名詞		さくら	さくら
一男	巻一	も	も	助詞		も	も
一男	巻一	ちる	ちる	動詞	連体	ちる	ちる
一男	巻一	に	に	助詞		に	に
一男	巻一	歎き	歎き	動詞	連用	なげく	なげき
一男	巻一	月	月	名詞		つき	つき
一男	巻一	は	は	助詞		は	は
一男	巻一	かぎり	かぎり	名詞		かぎり	かぎり
一男	巻一	あり	あり	動詞	連用	あり	あり

3.2 分析について

『万の文反古』は十七章からなるので、本研究では、作品を章に分割して分析に用いることとした。西鶴の作品は、一般的に短編集であるとされており、中村幸彦[8]もこれからの分析には、章単位で検討を行うことも必要であると述べている。

分析では、『万の文反古』の文章を検討するために、西鶴の作品として疑いのない『好色一代男』と、遺稿集中でも『万の文反古』と同じ版元から出版された『西鶴織留』を用いた。『万の文反古』と同様に『好色一代男』と『西鶴織留』も章単位に分割し、分析に用いる。『好色一代男』は五十四章、『西鶴織留』は二十三章である。

また、分析には基本的な情報である品詞の出現率を用いた。「西鶴全集データベース」に準ずると、これらの作品に出現する品詞は、名詞・助詞・動詞・助動詞・副詞・形容詞・接頭語・連体詞・接続詞・形容動詞・感動詞・連語・接尾語・補助動詞の 14 品詞である。この中で出現頻度の高い上位 6 つの品詞(名詞・助詞・動詞・助動詞・副詞・形容詞)を分析に用いた。分析対象の 3 作品に関しては、6 品詞の出現率は表 2 になる。

表 2 上位 6 品詞の比率

	名詞	助詞	動詞	助動詞	形容詞	副詞
万の文反古	0.34	0.28	0.22	0.06	0.03	0.03
好色一代男	0.34	0.34	0.17	0.07	0.03	0.02
西鶴織留	0.35	0.34	0.15	0.07	0.03	0.02

## 4. 分析結果

### 4.1 『万の文反古』と『好色一代男』の文章比較

『万の文反古』の文章と西鶴作であることが確実な『好色一代男』の文章との比較を行う。

「西鶴全集データベース」に準ずると、『万の文反古』において、本文のみで最も長い文は、巻三の二「明て驚く書置箱」の1,328語であり、最も短い文章は巻一の四「来十九日の栄耀献立」の561語である。また、文章の平均の長さは、約996語である。『好色一代男』において本文のみで最も長い文は、巻七の三「人のしらぬわたくし銀」の926語であり、最も短い文は巻一の三「人には見せぬところ」の536語である。また、文章の平均の長さは、約681語である。

図1は、上位6品詞の出現率を用いたボックスプロットである。『万の文反古』と『好色一代男』の品詞の出現率を見てみると、助詞と動詞に差がみられたが、名詞と助動詞と形容詞と副詞には差は見られなかった。

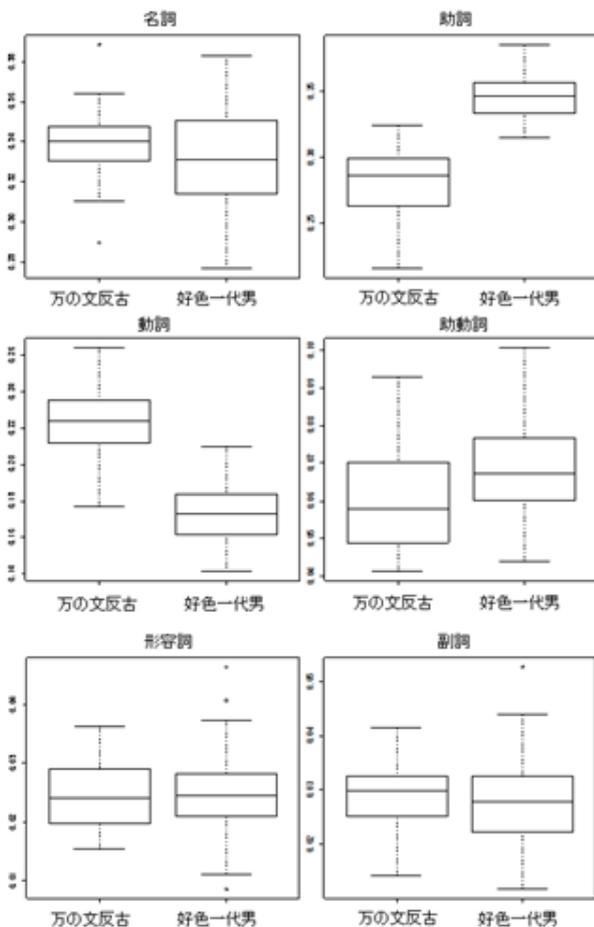


図1 『万の文反古』と『好色一代男』のボックスプロット

図2は、上位6品詞の出現率を主成分分析で分析した結果である。

この図の横軸は第一次主成分、縦軸は第二次主成分で、

『万の文反古』十七章と『好色一代男』五十四章の上位6品詞の出現率が互いに類似している章ほど近くに位置するように付置されている。主成分寄与率は第一主成分では33.56%で、第二主成分では28.66%であり、第二主成分までの累積寄与率は62.22%となる。つまり、第一主成分と第二主成分で用いた6品詞の出現率に関する情報の62.22%の説明ができる。

『万の文反古』の各章と『好色一代男』の各章が位置する範囲を線で囲ってみると、それぞれの章は、全くのバラバラに位置するのではなくて、作品ごとにある程度まとまりをもっていることがわかる。このことは、同じ作品では、6種類の品詞の出現率が互いに類似していることを示している。

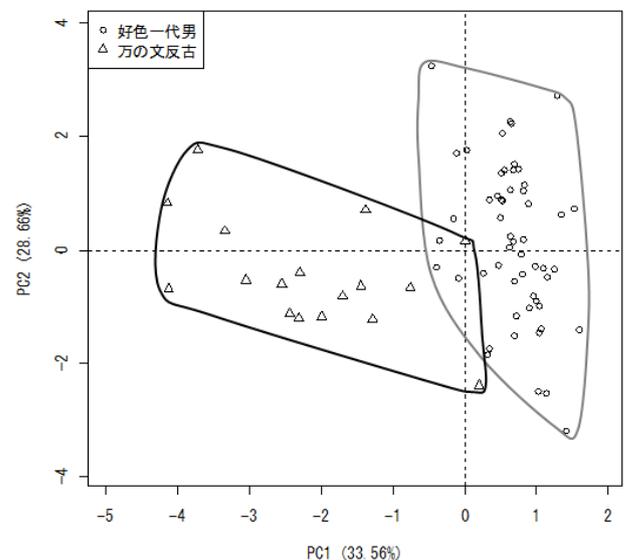


図2 『万の文反古』と『好色一代男』の主成分分析  
 (相関係数行列)

主成分ベクトル(主成分の係数)をみると、第一主成分においては、助詞・形容詞・助動詞が正の方向に、動詞・名詞・副詞が負の方向に影響を与え、第二主成分では、名詞・助詞が正の方向に、副詞・助動詞・動詞・形容詞が負の方向に影響を与える(表3)。

図2において、『万の文反古』は中心から左側にかけて付置され、『好色一代男』は、中央から右側にかけて付置されている。

表3 6品詞の主成分ベクトル

	PC1	PC2	PC3	PC4	PC5	PC6
名詞	-0.23	0.63	-0.13	-0.25	0.54	0.43
助詞	0.63	0.14	0.01	0.48	-0.14	0.58
動詞	-0.62	-0.28	0.04	0.02	-0.41	0.61
助動詞	0.27	-0.30	0.70	-0.50	0.20	0.24
副詞	-0.06	-0.61	-0.25	0.32	0.68	0.12
形容詞	0.32	-0.23	-0.66	-0.60	-0.17	0.17

これらのことから、『万の文反古』は、動詞・名詞の出現率が高く、『好色一代男』では、助詞・助動詞・形容詞の出現率が高いことがわかる。助動詞・助詞は付属語であり、名詞・副詞・動詞・形容詞は自立語である。よって、『好色一代男』では、『万の文反古』に比べて付属語の出現率が高いといえる。

このことから、以下のような可能性があると考えられる。

- 1) 『好色一代男』と『万の文反古』の一部の章では、作者が異なるため、6品詞の出現率に違いがある。
- 2) 『万の文反古』には、他作者の補筆・偽作などがあり、このことから、6品詞の出現率に違いがある。

#### 4.2 『万の文反古』と『西鶴織留』の文章比較

次に、西鶴の遺稿集の中で同じ版元から『万の文反古』よりも先に出版された第二遺稿集『西鶴織留』との比較を行う。『西鶴織留』において、最も長い文章は、巻二の二「五日帰りにお袋の異見」の1,977語であり、最も短い文章は巻二の五「当流のもの好」の525語である。また、文章の平均の長さは、約1,288語である。

『万の文反古』と『西鶴織留』における上位6品詞の出現率を主成分分析で分析した結果が図4である。この分析結果の図では、横軸を第一次主成分、縦軸を第二次主成分である。主成分寄与率は、第一主成分では43.23%で、第二主成分では23.23%であり、第二主成分までの累積寄与率は、66.46%である。

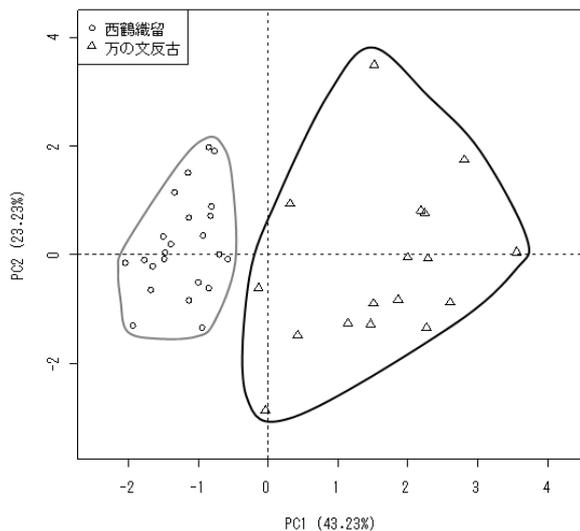


図3 『万の文反古』と『西鶴織留』の主成分分析  
 (相関係数行列)

主成分ベクトル（主成分の係数）を見てみると、第一主成分においては、動詞・副詞が正の方向に、助詞・助動詞・形容詞・名詞が負の方向に影響を与え、第二主成分では、名詞が正の方向に、形容詞・副詞・助詞・助動詞・動詞が負の方向に影響を与える。

『万の文反古』は、中央から右側にかけて付置され、『西

鶴織留』は、左側にまとまりをもって付置されていることから、『万の文反古』には、副詞・動詞の出現率が高く、『西鶴織留』では、形容詞・助動詞・名詞・助詞の出現率が高いことがわかる。

表4 6品詞の主成分ベクトル

	PC1	PC2	PC3	PC4	PC5	PC6
名詞	-0.08	0.73	-0.35	0.22	-0.45	-0.30
助詞	-0.54	-0.14	-0.17	0.33	0.51	-0.54
動詞	0.60	-0.06	0.11	-0.28	0.05	-0.74
助動詞	-0.36	-0.11	0.74	0.10	-0.49	-0.24
副詞	0.35	-0.46	-0.19	0.73	-0.30	0.00
形容詞	-0.30	-0.47	-0.50	-0.46	-0.45	-0.13

この分析結果から、次の可能性が考えられる。

- 1) 補作などがされたとすれば、『西鶴織留』と『万の文反古』で修正された比率が違うため、6品詞の出現率に違いがある。
- 2) 『万の文反古』と『西鶴織留』の文章のどちらかのみ、他作者の補筆・偽作などがあり、このことから、6品詞の出現率に違いがある。

#### 4.3 『好色一代男』と『西鶴織留』の文章比較

これまでは、6品詞の出現率を用い、『万の文反古』との比較を行ってきたが、この節では、『好色一代男』と『西鶴織留』の比較を行う。『万の文反古』と『西鶴織留』における上位6品詞の出現率を主成分分析で分析した結果が図4である。

この分析結果の図では、横軸は第一次主成分、縦軸は第二次主成分である。主成分寄与率は、第一主成分では35.49%で、第二主成分では23.9%であり、第二主成分までの累積寄与率は、59.39%である。

図4をみると、『好色一代男』と『西鶴織留』は、互いに混じり合って付置されていることがわかる。

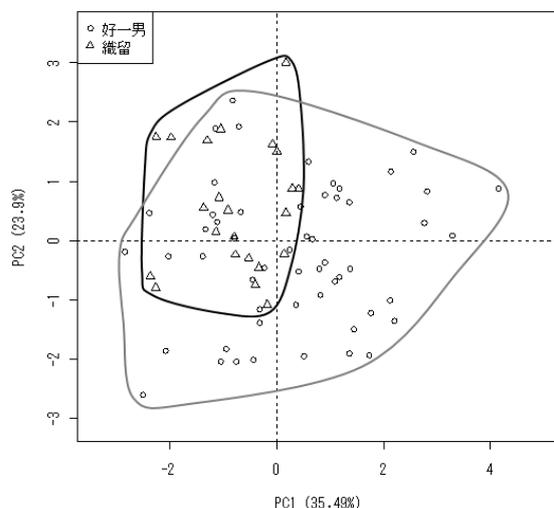


図4 『好色一代男』と『西鶴織留』の主成分分析  
 (相関係数行列)

表 4 6 品詞の主成分ベクトル

	PC1	PC2	PC3	PC4	PC5	PC6
名詞	-0.61	0.31	0.07	-0.01	0.27	-0.67
助詞	-0.20	-0.69	-0.19	0.31	-0.47	-0.35
動詞	0.48	-0.40	0.08	-0.51	0.36	-0.46
助動詞	0.37	0.31	0.61	0.14	-0.51	-0.33
副詞	0.44	0.14	-0.31	0.71	0.38	-0.22
形容詞	0.18	0.38	-0.70	-0.33	-0.42	-0.22

この分析結果から、上位 6 品詞の出現率において『好色一代男』と『西鶴織留』は、似たような傾向を持つということがわかる。

## 5. おわりに

本研究では、『万の文反古』・『好色一代男』・『西鶴織留』の三作品を品詞の出現率の観点から比較、分析した。その結果、二作品ごとの比較では、『万の文反古』と『好色一代男』、『万の文反古』と『西鶴織留』では、異なった特徴を持つという結果を得たが、『好色一代男』と『西鶴織留』では、似た特徴を持つということが判明した。

このことから、『万の文反古』には、編集者の手が加わった可能性は否定できない。しかしながら、各々の作品の内容や成立時期などが品詞の出現率に影響を与えていることも考えられる。また、品詞の出現率だけでなく、他の情報を用いた分析による検討も必要であり、これらは今後の課題である。

## 参考文献

- [1] 森銑三：『西鶴と西鶴本』、元々社（1955）。
- [2] 浅野晃，富士昭雄，谷脇理史，西島孜哉，小川武彦，篠原進：『新編西鶴全集第一巻～第四巻』、勉誠出版（2000）。
- [3] 山口剛：解説『西鶴名作集下』（日本名著全集江戸芸文之部）、日本名著全集刊行会（1929）。
- [4] 中村幸彦：『万の文反古』の諸問題』、『中村幸彦著述集第六巻』、p66-97、中央公論社（1982）。
- [5] 板坂元：『西鶴文反古』団水擬作の一資料』、『文学』23（1）、p68-76、岩波書店（1955）。
- [6] 暉峻康隆：『西鶴研究ノート』、中央公論社（1953）。
- [7] 谷脇理史：『萬の文反古の二系列』、『西鶴研究論攷 新典社研究 5』、p383-404、新典社（1981）。
- [8] 中村幸彦：『西鶴入門』、『国文学解釈と鑑賞 10 月特集増大号』、p10-25、至文堂（1969）。